

日本語の不確定代名詞重複表現について

工 藤 和 也

▶ キーワード

不確定代名詞、重複、閉鎖引用、
作用域、束縛変項解釈

▼ 要 旨

日本語には「誰々」や「何々」のように不確定代名詞を重複して用いる表現がある。これらは意味的に類似する他の表現と比べて生産性が高く、「人」・「物」・「時間」・「場所」・「数量」を表す名詞相当語句であれば幅広く代用できるが、Sudo (2007) によると、統語的には閉鎖引用でしか認可されないという制限がある。また、Sudo (2007) は、当該表現について、定名詞句のみを先行詞にする一方、数量詞のような作用域を持つという意味的な二重性があると主張しているが、当該表現が数量詞のように振る舞うという観察には疑わしい点もあり、今後さらなる精査が必要である。

1. はじめに

本稿の目的は、日本語の不確定代名詞重複表現について、その形態統語的および意味的特徴を記述することである。

日本語の「誰」や「何」という形態素は、英語の疑問詞の who や what とは異なり、単独で文に生起することができない (Kuroda 1965)。これらの形態素は、文中の他の要素との組み合わせによってはじめて認可され、また、組み合わせる要素の種類によって様々な意味を表出することから、それ自体では確定的な語彙情報を持たないという意味で「不確定代名詞」(indeterminate pronoun) と呼ばれている。

例えば、「何」という不確定代名詞に「か」という副助詞を付加すれば「何か」という存在量化子になり、「も」という係助詞を付加すれば「何も」という否定極性表現になる。

- (1) a. 太郎は何かを食べた。

b. 太郎は何も食べなかった。

また、不確定代名詞に直接要素を付加する以外に、終助詞「か」や係助詞「も」などによって統語的に離れた位置から関係を結ぶことでも不確定代名詞は認可される。

- (2) a. 太郎は何を食べましたか?
b. 太郎は何を食べもしなかった。

これらの不確定代名詞とその共起要素および表出される機能をまとめると、以下のようになる((3)はShimoyama (2006: 143)を参考に作成。表の「-」はその組み合わせが存在しないことを、括弧内の要素は現代語では語彙化しており特定の表現でしか用いないことを表す)¹⁾。

(3)

疑問詞	全称量化子	存在量化子	否定極性表現	自由選択表現
誰... か	誰も	誰か	誰も	誰でも
何... か	(何も)	何か	何も	何でも
どの... か	どの～も	どの～か	どの～も	どの～でも
どこ... か	どこも	どこか	どこも	どこでも
いつ... か	いつも	いつか	-	いつでも
いくつ... か	いくつも	いくつか	-	いくつでも
どれ... か	どれも	どれか	どれも	どれでも
どちら... か	どちらも	どちらか	どちらも	どちらでも
いくら... か	いくらも	いくらか	-	いくらでも
なぜ... か	-	なぜか	-	-
どう... か	(どうも)	(どうか)	(どうも)	どうでも

このような観察は生成文法の初期の段階から存在しており、それぞれの組み合わせの統語的あるいは意味的特徴を分析した文献も数多く見られる。しかしながら、(4)に示すような不確定代名詞の重複表現に関する研究はこれまでのところほとんど行われていない。

- (4) a. 誰々が君の悪口を言っていたと上司から聞かされたよ。
b. ホームルームで先生が明日何々を持ってきなさいと子どもたちに注意した。
c. おじいちゃんなら、確か今日はどこどこを回ってくると言っていました。
d. スーツはいついつに仕上がりますと店員さんが教えてくれました。
e. あの店に行ってどれどれが欲しいと伝えたらすぐに持ってきてくれました。

後で詳しく見るように、これらの表現は基本的に引用節内で使用されるので、やや口語的な響きを持つが、書き言葉としても十分成立する。そして、重要なことは、これらの例では不確定代名詞を重複しなければ文が許容されないということである。

- (5) a. *誰が君の悪口を言っていたと上司から聞かされたよ。
 b. *ホームルームで先生が明日何を持ってきなさいと子どもたちに注意した。
 c. *おじいちゃんなら、確か今日はどこを回ってくると言っていました。
 d. *スーツはいつに仕上がりますと店員さんが教えてくれました。
 e. *あの店に行ったらどれが欲しいと伝えたらすぐに持ってきてくれました。

したがって、これらの例では、「重複」という操作が不確定代名詞を認可する一つの手段となっていることがわかる。これは、重複操作が一般に持っている「複数」や「強調」の意味をもたらす効果とは明らかに異なる性質である。実際、(6)や(7)に示すように、不確定代名詞を重複させた場合でも、このような効果が観察されることはある。

- (6) a. 今日の参加者は誰々ですか？ (複数)
 b. 遠足には何々を用意したらいいでしょうか？ (複数)
 (7) a. 何々、来年度の予算決定だって。 (強調)
 b. どれどれ、見せてみて。 (強調)

しかしながら、これらの文では、多少ニュアンスが変わってしまうとしても、重複をしないと文そのものが許容できなくなるということはない。

- (8) a. 今日の参加者は誰ですか？
 b. 遠足には何を用意したらいいでしょうか？
 (9) a. 何、来年度の予算決定だって。
 b. どれ、見せてみて。

(8)では文末の終助詞「か」が「誰」や「何」といった不確定代名詞を認可しているし、(9)の「何」や「どれ」は感動詞(間投詞)であるため、文中に認可要素が必要ない。むしろ、不確定代名詞を重複させて人や物を複数解釈する用法は現代語では薄れているので、(6)を不自然だと感じる話者もいる²⁾。したがって、(4)のような不確定代名詞の重複表現は、重複という操作の機能的観点からも興味深い現象であると言える。しかしながら、当該表現に関する先行研究は極めて少なく、その統語的あるいは意味的特徴についてはいまだ解明されていない点も多い。

本稿は、これらの不確定代名詞重複表現を取り上げ、その理論的分析に向けて、言語事実を記述することを試みる。ただし、不確定代名詞重複表現の分布は多岐にわたるので、本稿では、重複をしないと不確定代名詞の生起が認可されない(4)のような例に絞って考察を行う。また、考察の対象も現代語に限定する。

2. 形態統語的特徴

本節では、まず不確定代名詞重複表現の形態統語的特徴について概観する。

2.1 生産性

不確定代名詞重複表現の一つの特徴として、その生産性の高さが挙げられる。まず、(3)に示した不確定代名詞を、重複表現が許されるものと許されないものに分類してみよう。

- (10) a. 誰々、何々、どこどこ、いついつ、いくついくつ、どれどれ、いくらいくら
b. *どのどの、*どちらどちら、*なぜなぜ、*どうどう

(3)に示した不確定代名詞のうち、重複表現として用いることができるのは、「誰々」、「何々」、「どこどこ」、「いついつ」、「いくついくつ」、「どれどれ」、「いくらいくら」の7つで、重複表現としての用法がないものは、「*どのどの」、「*どちらどちら」、「*なぜなぜ」、「*どうどう」の4つである。これだけを見ると、不確定代名詞重複表現の生産性はそれほど高くないように思われるかもしれないが、重複が許されない例は、それなりの理由があって排除されているように思われる。

まず、重複表現が許されない不確定代名詞のうち、「どの」は後ろに名詞表現があつてはじめて機能する連体詞なので、そもそも単独での重複操作にはなじまないと考えられる。次に、「なぜ」や「どう」は、不確定代名詞の一種として扱われることが多いが、機能的には「理由」や「方法」を表す副詞であり、重複操作が名詞相当語句にしか適用されないと仮定すると、これらの表現も自動的に排除される。最後に、「どちら」は独立した代名詞であるので、重複表現が許されてもよさそうであるが、実際には「*どちらどちら」という表現はかなり不自然である。本稿はこの点について明確な説明を与えることはできないが、類似表現の「*どっちどっち」や「*いずれいずれ」もやはり不可能であるので、これらの選言的解釈の不確定代名詞は「どれどれ」を除いてすべて重複が不可能なのかもしれない³⁾。いずれにしても、これらを例外として排除すると、その他の不確定代名詞はすべて重複して使用することができるため、不確定代名詞の重複表現は基本的には生産性が高いと言える。

不確定代名詞重複表現の生産性の高さは、これらと意味機能が似ている他の表現と比較しても明らかである。例えば、不確定代名詞重複表現とまったく意味が近いと考えられる「誰それ」や「どこそこ」のような不確定代名詞と指示代名詞を組み合わせた表現は、(3)のリストにある不確定代名詞ではこの2つのみ可能で、「*どれそれ」や「*どのその」、「*どちらそちら」などは、同じド系の不定称を含んでいても指示代名詞との組み合わせが存在しない。さらに、指示代名詞を重複させて不特定の対象を表す用法が可能なのは、おそらく「これこれ」のみで、その他の組み合わせは少なくとも現代語では用いられない⁴⁾。前述のように、「どの」や「どちら」はそもそも不確定代名詞としての用法の幅が狭いので、これらの表現が存在しないのも当然と考えられるかもしれないが、重要なことは、不確定代名詞と指示代名詞の組み合わせは、そもそもド系の不定称がなければ成立せず、「*何それ」や「*いつそこ」などの表現はまったく生産性がないことである。この点からも不確定代名詞を重複して使用するという方法は、関連する他の表現と比べて生産性が高いと言えるだろう。

2.2 範疇

次に、不確定代名詞重複表現の統語範疇を見てみよう。

不確定代名詞という名が示唆するように、「誰」や「何」は本来、名詞表現を置き換える語であるから、不確定代名詞重複表現も基本的には(11a)のような名詞句の代用であると考えられる。しかしながら、(11b)から(11e)に示すように、不確定代名詞重複表現にはいくつかの拡張的な用法があるものもある。

- (11) a. 名詞句：誰々がこう言っていたとわざわざ報告しにくる人がいますね。
b. 形容詞的名詞：日本人には何々な人が多いと一括りにすることはできない。
c. 動詞的名詞：英語の動詞に-erを付けると「何々する人」という意味になります。
d. 名詞節の一部：彼についてはよくわからない点が多く、「何々と言われている」くらいの情報しかありません。
e. 数詞：留学するにはいくらいくらのお金が必要だと言われました。
留学するにはいくらいくらお金が必要だと言われました。

特に、「何々」に関しては、名詞句としての用法以外に、名詞関連表現として形容詞的名詞（形容動詞）や動詞的名詞、さらには名詞節から補文標識を除いた部分を代用する用法も許されており、不確定代名詞重複表現の中でもっとも範疇の幅が広い⁵⁾。また、「いくらいくら」や「いくついくつ」は数詞として機能し、被修飾先の名詞句から遊離することもできる。

2.3 分布

最後に、不確定代名詞重複表現の分布について、Sudo (2007) の観察を見ておこう。Sudo は不確定代名詞重複表現の生起環境について、次のような一般化を提唱している。(Sudo は不確定代名詞重複表現を “Wh-doublets” と呼んでいる。)

- (12) Wh-doublets are licensed in closed quotations. (Sudo 2007: 8)

「閉鎖引用」(closed quotation) は Recanati (2000) の用語であるが、Sudo (2008a: 342-3) によると、閉鎖引用およびその対立概念である開放引用 (open quotation) の定義は次のとおりである⁶⁾。

- (13) a. Closed Quotation:
A closed quotation is used as a singular term that refers to the expression enclosed by the quotation marks. The entire sentence expresses that the quoted expression has such-and-such property or is used in such-and-such way.
b. Open Quotation:
The quoted material in an open quotation is used syntactically and semantically in an

ordinary way, though it carries a certain connotation.

要するに、閉鎖引用とは、引用部分は何らかの言語表現の現れとして文全体のそれ以外の部分から完全に独立していると捉えられる引用のことである。したがって、閉鎖引用は機能的には直接引用（direct quotation）の一種と考えられ、実際、不確定代名詞重複表現は他者の発言を直接的に引用する際に、その引用節内に生起することが一般的である。

(14) メアリーの発言：ビルが市役所にいる。

- a. ジョンは（メアリーから）「ビルが市役所にいる」と聞いた。 (直接引用)
- b. ジョンは（メアリーから）「誰々がどこどこにいる」と聞いた。 (閉鎖引用)
- c. ジョンは（メアリーから）ビルが市役所にいることを聞いた。 (間接引用)

(14b) の閉鎖引用が (14a) の直接引用と異なる点は、メアリーの発言の一部を不確定代名詞重複表現で置き換えていることである。直接引用は先行発言を一字一句変えない（書き言葉では「」で括る）ことが原則であるが、閉鎖引用ではその一部を代名詞に置き換えても問題がない（以下、本稿では閉鎖引用を「」で括る）。しかしながら、(14b) の埋め込み節を (14c) のような間接引用とみなすことはできない。実際、間接引用内に不確定代名詞重複表現を生起させた (15) は非文である (Sudo 2007: 15)。

(15) *ジョンは（メアリーから）誰々がどこどこにいることを聞いた。

Maynard (1984) によると、日本語の補文標識「と」は直接引用にも間接引用にも使えるが、「ことを」は間接引用でしか使えない。したがって、(15) の非文法性が示しているとおり、(14b) は直接引用の一種として解釈すべきであり、不確定代名詞重複表現はその一部を置き換えて生起しているということがわかる。

直接引用と間接引用における不確定代名詞重複表現の振る舞いの違いは、次のような例からも明らかである。

- (16) a. *ジョンは昨日誰々が来たか聞いた。 (Sudo 2007: 20)
- b. ジョンは「昨日誰々が来たか」と聞いた。 (Sudo 2007: 20)

(16a) には直接引用を示す補文標識「と」がないため、引用部分が間接引用としか解釈されず、その中に不確定代名詞重複表現が生起しているため容認されない（「誰々」が人物の複数を表す解釈は除く）。一方、(16b) のように、補文標識「と」があると、引用部分は直接引用としての解釈も可能となり、その中に不確定代名詞重複表現を用いることには問題がない。Sudo (2007) は、不確定代名詞重複表現が生起するこのような環境を「発話の閉鎖引用」(closed quotations of utterances) と呼んでいる。

また、閉鎖引用は、その引用部分が単数の名詞句あるいは名詞節として機能するので、統語的には文の構成要素（主語や目的語）になることができる。したがって、不確定代名詞重複表

現はメタ言語的に言語の意味や機能を説明する次のような例にも頻出する。

- (17) a. [何々が欲しい] は形容詞句だ。 (Sudo 2007: 46)
b. [To break 何々] は [何々を壊す] という意味だ。 (Sudo 2007: 46)

これらの例は (14b) のような他者の発言の引用とは少し性質が異なっている。例えば、(17a) では、先行文として「車が欲しい」のような発言がなくても閉鎖引用を用いて不確定代名詞重複表現を使用することができる。しかしながら、「何々が欲しい」は「何々」の部分に何らかの語彙項目を代入することで無限の使用例が存在するので、少なくとも話者の頭の中には何らかの先行文が存在しており、話者はそれをもとにこのような引用を行っていると言えるかもしれない。Sudo (2007) は、不確定代名詞重複表現が現れるこのような環境を「言語特性の閉鎖引用」(closed quotations of linguistic properties) と呼んでいる。

なお、開放引用での不確定代名詞重複表現の使用は、以下に見るように不可能である。

- (18) a. *この問題は“何々の問題”の一例だ。 (Sudo 2007: 25)
b. *彼こそ典型的な“どこどこから来た人”だ。 (Sudo 2007: 26)

すなわち、「～の一例」や「典型的な～」のように、引用部分がそれ以外の要素と統語的な関係を持つ場合は、引用部分に不確定代名詞重複表現が現れることはできない。

2.3.1 かき混ぜ

Sudo の主張する (12) の一般化は、統語的に様々な予測を持つ。

第一に、閉鎖引用は統語的に閉じられているので、不確定代名詞重複表現が生じた引用節内の要素はその引用部分を超えてかき混ぜることができないと予測されるが、以下に見るようにこの予測は正しい。

まず、不確定代名詞重複表現が生起する引用節内で、引用部分を越えなければかき混ぜが可能であることを確認しておこう。

- (19) ジョンの発言：明日ビルが筆箱を買う。
a. ジョンは [明日誰々が筆箱を買う] と言った。
b. ジョンは [[筆箱を]_i 明日誰々が _{t_i} 買う] と言った。
c. ジョンは [[誰々が]_i 明日 _{t_i} 筆箱を買う] と言った。

ジョンの発言を報告した (19a) の引用節内で名詞句「筆箱を」をかき混ぜた (19b) や不確定代名詞重複表現「誰々が」をかき混ぜた (19c) は問題がない。これは先行文の語順 (実際のジョンの発言における各語の語順) には影響を受けないので、不確定代名詞重複表現が生起する引用節内でのかき混ぜ操作自体は可能であることがわかる。

これを踏まえて、次例を観察されたい。

(20) ジョンの発言：ビルが渋谷で本を買った。

- a. [本を]_i ジョンはビルが渋谷で _i 買ったと言った。
- b. *[本を]_i ジョンは [ビルがどこどこで _i 買った] と言った。
- c. *[どこどこで]_i ジョンは [ビルが _i 本を買った] と言った。

((b), (c) from Sudo (2007: 17))

ジョンが「ビルが渋谷で本を買った」と言った状況の報告として、引用節内から名詞句「本を」を主節にかき混ぜた(20a)は問題がない。これは、(20a)の引用節が間接引用と解釈できるからである。一方、場所句を不確定代名詞重複表現に置き換えた引用節内から同じ「本を」を主節にかき混ぜた(20b)や不確定代名詞重複表現「どこどこで」を主節にかき混ぜた(20c)はいずれも非文である。したがって、不確定代名詞重複表現が生起する引用部分は、その外への要素の抜き出しが不可能な閉鎖引用であることが示唆される。

2.3.2 WH 疑問文

第二に、閉鎖引用は引用内の要素が引用外の要素と統語的な関係を結ぶことができないので、不確定代名詞重複表現が生起した引用節内の疑問詞は主節の終助詞によって認可することができないと予測されるが、(21)に示すように、この予測も正しい。

(21) ジョンの発言：ビルが筆箱を買う。

- a. ジョンは(昨日)誰が筆箱を買うと言ったの？
- b. *ジョンは(昨日)[誰が何々を買う]と言ったの？

ジョンが「ビルが筆箱を買う」と言ったことに対する質問として、(21a)は適格であり、例えば「ビルだよ」と答えることができる。これは引用節内の疑問詞「誰」が主節の終助詞「の」によって認可され、文全体がwh疑問文として解釈できることを意味している。同じ状況で、(21b)のように引用節内に不確定代名詞重複表現を生起させることはできないので、不確定代名詞重複表現が生起した引用部分は、その中の疑問詞をその外の認可子によって認可することができない閉鎖引用であることが示唆される。

2.3.3 主節現象

第三に、閉鎖引用は機能的には直接引用の一種であるので、不確定代名詞重複表現が生起する引用節は埋め込みの環境にありながら主節のように振る舞うことが予測される。したがって、閉鎖引用内では本来主節でしか起こらない主節現象(root phenomena)が観察されると予測されるが、この予測も正しい。

まず、不確定代名詞重複表現が通常の主節には生起しないことを確認しておこう。つまり、(22)は単独で発話された場合、解釈が不可能な文となる。

- (22) a. *ビルが何々を買った。 (Sudo 2007: 7)
- b. *誰々がビルを愛している。 (Sudo 2007: 7)

c. *誰々が何々を見た。

(Sudo 2007: 7)

しかしながら、閉鎖引用は統語的には直接引用と同じ主節扱いになるので、不確定代名詞重複表現が生起する引用節内では様々な主節現象が見られる。以下、Sudo (2007: 22-25) に挙げられている不確定代名詞重複表現が生起する引用節内での主節現象をまとめておく。

- (23) a. 命令文：ジョンはビルに〔何々を読め〕と言った。
b. 話題表示：ジョンは〔ビルはその後どこどこへ行った〕と言った。
c. 疑問の終助詞「の」：ビルはメアリーに〔誰々は来るの〕と聞いた。
d. 断定の終助詞：ビルは〔誰々が本を買った{ね/さ/よ}〕と言った。
e. 文末の丁寧表現：ビルは〔誰々が本を買いました〕と言った。
f. 右方向へのかき混ぜ：ビルは〔何々を買う、ジョンが〕と言った。

いずれの例でも、不確定代名詞重複表現が生起する引用節内で本来主節でしか見られない文法現象が観察されている。このことから、不確定代名詞重複表現が生起する引用節は主節としての言語機能を持った直接引用の一種（つまり、閉鎖引用）であることが示唆される。

以上より、不確定代名詞重複表現は閉鎖引用内でのみ認可されるという Sudo (2007) の一般化は経験的に妥当なものと思われる。Sudo はその理由を不確定代名詞重複表現が数量詞上昇 (quantifier raising) するという前提に基づいて意味論の観点から説明しているが、3.2節で見るように、不確定代名詞重複表現が数量詞のように振る舞うという根拠は整っていないように思われる。したがって、不確定代名詞重複表現の分布については、いまだ原理的な説明が与えられていないと言える。

3. 意味的特徴

次に、本節では、不確定代名詞重複表現の意味的な性質の記述を試みる。

3.1 基本的意味

不確定代名詞の重複表現について、辞書にはおおむね2つの用法が載っている。例えば、小学館の『日本国語大辞典』（第二版）には「誰々」（見出し語は「たれたれ」）の意味について、次の2つが載っている。

- (24) a. 不特定の複数の人をさす。
b. (「だれだれ」の形で) 不特定の単数の人をさす。だれそれ。某。

(24a) の意味は、「山々」や「人々」など、重複という操作一般に付随する複数解釈の意味で、昔は「たれたれ」の形でこの用法が一般的であったことを窺わせる⁷⁾。ただし、この意味での用法で、必ずしも重複操作が必要であるかどうかは定かではない（注2参照）。また、前述のよう

に、この複数解釈の用法は次第に薄れてきており、現代では必ずしもすべての話者に共有されているわけではない。一方、(24b)の意味が、本稿で扱っている不確定代名詞重複表現の中核となる意味である。しかしながら、この辞書表記から、この意味での用法は「誰々」を「だれだれ」と発音するようになった近代以降に定着した比較的新しいものであると推測できる⁸⁾。

いずれにしても、どの不確定代名詞重複表現にも共通しているのは「不特定の」という意味である。次例が示すように、不特定の理由は、名前が分からない、たくさんあって一つ一つ挙げられない、敢えて具体的に言わない、など様々であると考えられる（(25)はインターネットの実例を元に作例したもの）。

- (25) a. 名前は知らないが、どうせ何々の岩とか、何々の松とか、何々の浦とか、何々の島とか、そんなものに決まっている。 (名前がわからない)
b. 私なんか幹事やる時は部長と課長とあと誰々が来るって最初に言っちゃってから募集しますけどね。 (一つ一つ挙げられない)
c. 第4文型は「誰々に何々をVする」というパターンなのです。 (敢えて具体的に言わない)

また、不確定代名詞重複表現は先行詞が具体的な指示対象を持つ名詞句の場合は使用できるが、不定の数量詞が含まれる場合は認可されない (Sudo 2007: 27)。

- (26) a. ジョンの発言：ビルが{メアリー／その女}を愛している。
ジョンは [ビルが誰々を愛している] と言った。
b. ジョンの発言：ビルが{誰か／たくさんの女／みんな}を愛している。
*ジョンは [ビルが誰々を愛している] と言った。

すなわち、不確定代名詞重複表現の先行詞には具体的な指示表現 (referring expression) が必要である。したがって、不確定代名詞重複表現が持つ「不特定」(unspecified) の意味は数量詞などが持つ「不定」(indefinite) の意味とは異なるものである (この点については次節の議論も参照されたい)。

以上より、不確定代名詞重複表現の基本的意味は、先行文を直接的に引用する際にその一部の具体的な指示表現を何らかの理由で不特定にして代用すること、ということになる。ただし、2.3節で見たように、不確定代名詞重複表現が「言語特性の閉鎖引用」で用いられている場合は、先行文は具体的な言語表現として表出されている必要はなく、話者の頭の中に存在すればいいという程度であろう。

3.2 作用域

次に、不確定代名詞重複表現と数量詞との異同について考察してみよう。

Sudo (2007) は、不確定代名詞重複表現は、先行詞に具体的な指示物を必要とする一方、数量詞のように量子子としての作用域を持つと主張している。Sudo がその主張の根拠としている

のは、次のような例である。

- (27) a. 3分の2の人だけがビルを愛している。
b. 3分の2の人だけが誰かを愛している。 (2/3 > 誰か、誰か > 2/3)
c. 3分の2の人だけが「誰々が来る」と言った。 (2/3 > 誰々、誰々 > 2/3)
(Sudo 2007: 28-9)

Sudoによると、(27a)の固有名詞「ビル」は作用域を持たないので、主語の「3分の2の人」と作用域の相互作用 (scope interaction) を起こさないが、(27b)のように不定数量詞「誰か」が用いられた場合は、主語と作用域の相互作用を起こし、解釈があいまいになる。例えば、「全員が誰かを愛しているわけではなく、全体の3分の2の人だけがそれぞれ別の人を愛している」という場合は、「3分の2の人」が「誰か」より広い作用域を持つ解釈で、「全員が誰かを愛しているが、そのうちの3分の2の人が愛している人物がたまたま同じ人だった」という場合は「誰か」が「3分の2」より広い作用域を持つ解釈となる。Sudoはこの2通りの解釈が(27b)の「誰か」を用いた場合に可能であることを確認したうえで、同様の曖昧性が「誰々」を用いた(27c)でも観察されると述べている。すなわち、(27c)では、「全員が誰かが来ると言ったわけではなく、全体の3分の2の人だけがそれぞれ別の人が来ると言った」(2/3 > 誰々)という解釈も、「全員が誰かが来ると言ったが、そのうちの3分の2の人が来ると言った人物がたまたま同じ人だった」(誰々 > 2/3)という解釈も可能である。このことから、Sudoは不確定代名詞重複表現には不定数量詞と同様の作用域があると結論付けている。

しかしながら、この結論にはいくつかの疑問点がある。第一に、例文の判断が文脈に依存し過ぎているように思われる。確かに、Sudoが言う2通りの状況で、上記の例が正文であることは理解できるが、何も文脈を設定せずに文だけを判断した場合、(27b)でも(27c)でも目的語が主語よりも広い作用域を取る(とSudoが主張している)解釈はかなり難しい。少なくとも、筆者のインフォーマント調査では主語が広い作用域を取る解釈が圧倒的に優勢であり、目的語が広い作用域を取る解釈は出ない人も多い。これには日本語が作用域に関して厳格な言語であるという事実が関与していると思われ、後に示すようにもう少し例文を工夫する必要があると思われる。

第二に、Sudoの言う2通り目の解釈は目的語が作用域を持つかどうかとは直接関係がない。すなわち、目的語に「ビル」という定名詞句を用いた(27a)でも「全員が誰かを愛しているが、そのうちの3分の2の人が愛している人物がたまたまビルだった」という解釈が可能である。Sudoの論理で言えば、これは「ビル」が「3分の2の人」よりも広い作用域を持つ解釈ということになるが、「ビル」という定名詞句が作用域を持つとは考えられない。したがって、Sudoが議論している2通りの解釈は作用域の相互作用とは独立の理由で可能なものであり、「誰々」が数量詞のように作用域を持つという結論には至らない。

第三に、Sudoの挙げている「誰か > 2/3」の解釈は「2/3 > 誰か」の解釈に論理的に含まれている。一般に、数量詞の作用域に相互作用が見られる言語では、統語的に高い位置に複数解釈の数量詞が現れ、低い位置に単数解釈の数量詞が現れた場合、解釈の曖昧性が作用域の相互作用によるものなのか、それとも表層での作用域の広さに従った解釈の一部であるのか区別

ができないとされている。

- (28) a. Everyone loves someone. ($\forall > \exists, \exists > \forall$)
b. Someone loves everyone. ($\exists > \forall, \forall > \exists$)

(28a) では、「全員が誰か一人を愛している」($\forall > \exists$)の解釈が、「誰か特定の一人を全員が愛している」($\exists > \forall$)の解釈をその一部に含んでいる。すなわち、「全員が誰か一人を愛している」とき、その「誰か」がたまたま同じ人であれば「誰か特定の一人を全員が愛している」ということになり、「 $\exists > \forall$ 」の解釈は「 $\forall > \exists$ 」の解釈の一部ということになる。要するに、作用域の相互作用をテストするのであれば、(28b)のように、全称量化子を統語的に低い位置に置く必要があり、この点からも、Sudoの例文における数量詞の配置は、作用域の有無を調べるテストとして不適切であると言える。

第四に、(27c)の文は(27b)の文と構造的に並行ではない。すなわち、(27b)の例では目的語の「誰か」と主語の「3分の2の人」が同一節内に生起しており、同節要素 (clause mate) となっているが、(27c)では「誰々」は引用節内 (つまり埋め込み節内) に生起しており、相互作用を起こすとされる「3分の2の人」と同節要素になっていない。仮に、この環境で相互作用が見られるのであれば、日本語の数量詞は同一節内のみならず、節を飛び越えての相互作用も可能であると認める必要がある。しかしながら、次例に見るように、英語でも日本語でも、長距離での作用域の相互作用は一概に不可能である (Saito 2005: 352)。

- (29) a. Someone loves everyone. ($\exists > \forall, \forall > \exists$)
b. Someone thinks that John loves everyone. ($\exists > \forall, * \forall > \exists$)
(30) a. 誰かが誰もを愛している。 ($\exists > \forall, *? \forall > \exists$)
b. 誰かが太郎が誰もを愛していると思っている。 ($\exists > \forall, * \forall > \exists$)

Saito (2005)によると、英語は、(29a)のように、数量詞が同節内にあれば作用域の相互作用が見られるが、(29b)のように、数量詞が埋め込み節内にあると、主節の数量詞より広い作用域を取ることができない。日本語は、(30a)のように、基本的に同節内でも作用域の相互作用は難しいが、後で見ると、文脈を丁寧に整えれば同一節内での相互作用は可能な場合もある。しかしながら、その日本語でも、英語と同様、埋め込み節内の数量詞は決して主節の数量詞より広い作用域を取らない。したがって、Sudoの言うように、埋め込み節内の不確定代名詞重複表現が主節の数量詞と相互作用を起こすのであれば、それはもはや通常の数量詞とも異なる振る舞いということになる。特に、2.2節で見たように、不確定代名詞重複表現が閉鎖引用にしか生起できないとすると、閉鎖引用内の要素とその外の要素との作用域の相互作用がなぜ可能であるのか、もう少し慎重に議論する必要があるだろう。

以上より、本稿ではSudoの議論は必ずしも不確定代名詞重複表現が作用域を持つという決定的な証拠にはなっていないと考える。では、なぜ(27c)の例で、Sudoの言う2通りの解釈が可能なのだろうか。おそらく、それは主語に「3分の2」という分断的な数詞を用いていることの影響だと思われる。例えば、「3分の2の人が〜した」と言えば、全体の集合を「3分の

2」と「3分の1」に分断し、「3分の2」の方を叙述することになる。このとき、残りの「3分の1」が何をしたのか（あるいはしなかったのか）は文の意味として取り出すことはできないはずであり、Sudoの設定している文脈はその点に関して恣意的なものということになる。また、第三の問題点として述べたように、(27c)の例で、3分の2の人が「誰かが来た」と言ったとき、それがたまたま同じ人であるという可能性はこの文の解釈の一部として常に保証されている。要するに、Sudoの言う2通りの解釈は、「誰か」や「誰々」が作用域を持つか否かに関係なく、文が持ち得る解釈の範囲と、叙述されていない残りの「3分の1」が何をしたのか（しなかったのか）という恣意的な文脈設定から導かれることになる。定名詞句の「ビル」を用いた(27a)で同様の解釈が得られるのも、おそらくこのためであろう。

ここで、不確定代名詞重複表現が本当に作用域を持たないのかについて、もう少し考察を加えてみよう。(30a)で見たように、Hoji (1985)以降、一般に日本語は英語と違って同一節内に数量詞が複数生起しても相互作用が起こらないとされている。

- (31) a. 誰もが誰かを愛している。 (V > ∃, *? ∃ > V)
 b. 誰かが誰もを愛している。 (∃ > V, *? V < ∃)

しかしながら、語用論的に相互作用を強制するとその解釈が容易になることも先行研究では指摘されている (Saito 2005: 343)。

- (32) 兵隊がどの門の前にも立っていた。 (#兵隊 > どの門、どの門 > 兵隊)

(32)は「ある一人の兵隊がすべての門の前に同時に立っている」という意味ではなく「複数の兵隊が分担してすべての門の前に立っている」と解釈される。これは「#兵隊 > どの門」の解釈が状況として不自然であるので、「どの門 > 兵隊」の解釈が代わりに優勢になるためと考えられている。同様の効果は主語に不定数量詞を用いた次のような例でも観察される。

- (33) 誰かがどの門の前にも立っていた。 (#誰か > どの門、どの門 > 誰か)

すなわち、「#誰か > どの門」が示すように、表層の作用域に厳格な解釈が語用論的に不自然と判断される場合は、その代替的な解釈として「どの門 > 誰か」の読みが自然に与えられることになる。

この環境を使って不確定代名詞重複表現に不定数量詞のような作用域があるかどうか調べてみよう。

- (34) 太郎の発言：Aが東門、Bが西門、Cが南門、Dが北門に立っている。
 a. 太郎は誰かがどの門の前にも立っているとやった。
 b. #太郎は「誰々がどの門の前にも立っている」とやった。

(34)では、先行文脈として門の前に立っている人物は複数であることを強制している。この状

況で (34a) のように報告することは可能であるが、(34b) のように報告することはできない。もし、「誰々」が「誰か」と同じく作用域を持つのであれば、(34b) は先ほど述べた代替的な解釈を受けて容認されてよいはずであるが、「誰々」が「どの門」に対して狭い作用域を持つ解釈は不可能であり、この文は実際の状況を正しく反映していない文と判断される。(34b) の不自然さは定名詞句を用いた「#ビルがどの門の前にも立っている」の不自然さと同等であり、このことから、不確定代名詞重複表現は作用域を持たない定名詞句であると結論付けて良いように思われる。

3.3 代名詞の束縛変項解釈

不確定代名詞重複表現が数量詞と振る舞いが異なることは、これらの表現が代名詞の束縛変項解釈を認可しないことから確かめられる。

Hoji (1985) 以来、日本語の数量詞は、その c-統御領域内にある代名詞に対して束縛変項解釈を許すことが知られている。

- (35) a. 先生が3人の学生_iにそいつ_iの論文を送り返した。
b. この美術館にあるすべての作品_iがそ_iの価値を下げられた。
c. [トヨタとニッサン]_iがそこ_iの取引先に訴えられた。

(35a) では、先行詞である「3人の学生」が取り得る値に対応する形で「そいつ」の値も変化する解釈 (A さんに A さんの論文を送り返し、B さんに B さんの論文を送り返し、C さんに C さんの論文を送り返したという解釈) が可能である。同様に、(35b) でも、「すべての作品」の取り得る値に応じて「その」の値が変化する解釈が可能である。さらに、この解釈は主語が「場所」と捉えられる場合でも同様で、(35c) では、トヨタとニッサンは分配されて、それぞれの会社の取引先に訴えられたという解釈になる。

ここで、不確定代名詞重複表現の束縛領域内にソ形の代名詞を置いて、その代名詞の束縛変項解釈が可能であるかを見てみよう。

- (36) a. 太郎は [先生が誰々_iにそいつ_iの論文を送り返した] と言っていた。
b. 太郎は [この美術館にある何々_iがそ_iの価値を下げられた] と思っている。
c. 新聞によると、[どこどこ_iの企業_iがそこ_iの取引先に訴えられた] らしい。

(36a, b, c) はそれぞれ正文ではあるが、(35a, b, c) を先行文脈とする事象の報告としてはいずれも不適格である。すなわち、(36a) では、先生が論文を送り返した相手は誰か一人であるとしか解釈できないし、(36b) でも何か一つの作品について述べているとしか解釈できない。(36c) も、どこか一社の話としてしか解釈できないだろう。

この解釈の違いは、「誰々」や「何々」が複数の事物を表す解釈ができないと考えれば自然に説明される。すなわち、不確定代名詞重複表現が単数を表す意味しか持たないのであれば、そもそも複数の事物の代用として置き換えることは不可能なので、束縛変項解釈を認可しないこ

とも当然の結果であると言える。実際、「誰か」も通常は単数解釈が優勢なので、(37) では、代名詞の束縛変項解釈はかなり難しいように思われる。

(37) 太郎は先生が誰か、にそいつ、の論文を送り返したと言っていた。

しかしながら、「誰か」の場合は、文脈によっては複数解釈が可能であり、その場合は代名詞の束縛変項解釈を認可できる。

(38) a. 太郎は先生が誰か、3人にそいつ、の論文を送り返したと言っていた。

b. *太郎は「先生が誰々、3人にそいつ、の論文を送り返した」と言っていた。

(38a) では、「3人」という数詞を付加することで、「誰か」の複数解釈を強制している。この場合、「誰か」は複数解釈され、「そいつ」の束縛変項解釈を生み出す認可子として適切に機能すると思われる。一方、(38b) では、「誰々」を同じ環境で用いても複数解釈を持たず、代名詞の束縛変項解釈を認可しない。この点からも、「誰々」のような不確定代名詞重複表現が「誰か」のような不定数量詞と同様に振る舞うという主張には根拠がないように思われる。

なお、ここでの議論は「誰々」という不確定代名詞重複表現が複数解釈を許さないということを示しているが、3.1節で述べたように、「誰々」が複数解釈を持つということは、少なくとも歴史的には確立していたと考えられる。これについて、「誰々」は、単数解釈と複数解釈で語のアクセントが異なっている可能性が指摘できる（単数解釈のときは dare'-dare のように最初の「れ」が高くなり、複数解釈のときは da're-dare のように最初の「だ」が高くなる）。したがって、両者はその語形成のプロセスも異なっている可能性があるが、本稿は、このうちの前者のみを扱ったものと理解されたい。これは最初に断ったように、不確定代名詞重複表現の分布が多岐にわたることにより対象を限定した結果であるが、仮に後者も含めて検討した場合、どのような結論が得られるかは今後さらに詳しい考察が必要である。

4. 終わりに

本稿は、日本語の不確定代名詞重複表現について、その形態統語的特徴および意味的特徴を記述することを試みた。当該表現は語形成における生産性が高く、これが統語構造において規則的に派生される可能性を窺わせているが、なぜこの表現が閉鎖引用内でしか認可されないのかという根本的な問題は未解決のまま残されている。意味的には、当該表現は閉鎖引用内で先行文における特定の情報を不特定にする機能を持っており、特定の情報を特定のまま置き換える通常の代名詞化（pronominalization）とはその派生プロセスが異なっていることがわかる。このことが、当該表現の分布を狭めている可能性も考えられるが、これらの疑問についての考察は今後の課題として稿を改めて論じたい。

注

1) 全称量子と否定極性表現は同じ音の並びでもアクセントの型が異なる。例えば、全称量子の「誰も」

は da're-mo と語頭にアクセントがあるが、否定極性表現の「誰も」はアクセント核のない平板型になる。

- 2) 不確定代名詞を重複することによって人や物の複数を表す用法は一部の方言では現在でも使われている。以下は関西方言での「誰」と「誰々」の疑問詞用法における容認度の違いを示している。

(i) [昨日、友達が1人しか来なかったとわかっているとき]

- a. 昨日、誰が来たん？
- b. *昨日、誰々が来たん？

(ii) [昨日、友達が複数来たことがわかっているとき]

- a. 昨日、誰が来たん？
- b. 昨日、誰々が来たん？

(iii) [昨日、友達が何人来たかわからないとき]

- a. 昨日、誰が来たん？
- b. 昨日、誰々が来たん？

—いや、太郎しか来なかったよ。／太郎と花子だよ。

これらの例から、関西方言では疑問詞の「誰」は単数／複数どちらの解釈も許すが、「誰々」は複数の解釈しか許さないことがわかる。

- 3) 実際、「昨日、山田先生がどちらどちらにお住いと仰っていた」のように、「どちら」が場所を表す「どこ」の待遇的表現として用いられた場合は容認度が上がるように思われる。

- 4) ただし、古典作品であれば、「それぞれ」も観察される。

(i) 「たれたれか。」と問へば、「それぞれ。」と言ふ。(枕草子・二月つごもりごろに)

(ii) 今めかしきはそれぞれと選り整へさせ給ふ。(源氏物語・第十七帖 総合)

- 5) Sudo (2008b) は、「何々」について、範疇の指定がなくどのような表現の置き換えにも使えるとして次の例を挙げている。

(i) ジョンが「ビルが何々」と言った。

(Sudo 2008b: 623)

Sudo は (i) の「何々」の部分には動詞句 (例：ケーキを食べた) や形容詞句 (例：賢い) などとも生起可能で、「何々」は範疇を指定しないと述べているが、筆者の内省では、(i) は「何々」の後ろにコピュラの「だ」がないと非文になるので、やはり「何々」は名詞相当語句の代用形であると考えられる。

- 6) Sudo (2008a: 343) は英語によるそれぞれの具体例として以下を挙げている。

(i) *Closed Quotations*

- a. John keeps crying and saying 'Nobody likes me'. (Recanati 2001: 649)
- b. You should never say 'never'. (Christensen 1967: 363)
- c. "Cicero" has 6 letters. (Abbott 2003: 1)
- d. "Incipient" is an adjective. (Abbott 2003: 1)

(ii) *Open Quotations*

- a. Quine says that quotation '... has a certain anomalous feature'. (Davidson 1979: 28)
- b. Alice said that life is 'difficult to understand'. (Cappelen and Lepore 1997: 433)

- 7) 実際、「誰々」や「何々」の複数解釈の用法は、古くは『宇津保物語』(970-999頃)まで遡ることができる。

- (i) a. たづねとはせ給ふ人もなければ、たれたれも対面給はることかたく… (沖つ白浪)
- b. こころ親が時の宝、櫛笄のなになにも惜しきものなく失い… (嵯峨院)

- 8) 「誰々」について、尾崎紅葉の『金色夜叉』(1897-1902) には、「たれたれ」という読みと「たれだれ」という読みの両方が使われている。また、薄田泣菫の『茶話：04 大正七 (一九一八) 年』(1918) には「たれだれ」という読みと「だれだれ」という読みが見られる。

- (i) a. 彼等を識らざる読者は湯屋の喧嘩も同じく、三ノ面記事の常套として看過すべく、何の違かその敵手の誰々 (たれたれ) なるを問はん。(金色夜叉)
- b. げに彼は某の妻のやうに出行かず、くれがしの夫人のやうに気儘ならず、又は誰々 (たれだれ) の如く華美を好まず。(金色夜叉)

- (ii) a. すりや、残の七人は誰々（たれだれ）でござりまするな。（茶話）
b. あとの七人は誰々（だれだれ）だらう—俺もその一人かな。（茶話）
したがって、「誰々」の発音は、「誰（たれ）」の合成語「たれたれ」に始まり、「たれだれ」という連濁を含む形を経て、現在の「だれだれ」になったと推測される。

参考文献

- Abbott, Barbara (2003) Some notes on quotation, *Belgian Journal of Linguistics* 17, 13-26.
Cappelen, Herman and Ernie Lepore (1997) Varieties of quotation, *Mind* 106, 429-450.
Christensen, Niels E. (1967) The alleged distinction between use and mention, *The Philosophical Review* 76, 358-367.
Davidson, Donald (1979) Quotation, *Theory and Decision* 11, 27-40.
Hoji, Hajime (1985) *Logical Form Constraints and Configurational Structure in Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Washington.
Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. Ph.D. dissertation, MIT.
Maynard, Senko K. (1984) Functions of *to* and *koto-o* in speech and thought representation in Japanese written discourse, *Lingua* 64, 1-24.
Recanati, François (2000) *Oratio Obliqua, Oratio Recta*. Cambridge, MA: MIT Press.
Recanati, François (2001) Open quotation, *Mind* 110, 637-687.
Saito, Mamoru (2005) Further notes on the interpretation of scrambling chains. In Joachim Sabel and Mamoru Saito (eds.), *The Free Word Order Phenomenon: Its Syntactic Sources and Diversity*, 335-376. Berlin: Mouton de Gruyter.
Shimoyama, Junko (2006) Indeterminate phrase quantification in Japanese, *Natural Language Semantics* 14, 139-173.
Sudo, Yasutada (2007) *Metalinguistic Variables in Natural Language Semantics: Evidence from Japanese Wh-doublets and Echo Questions*. MA Thesis, University of Tokyo, Tokyo.
Sudo, Yasutada (2008a) Japanese wh-doublets and metalinguistic variables, *Toronto Working Papers in Linguistics* 28, 341-356.
Sudo, Yasutada (2008b) Quantification into quotations: Evidence from Japanese wh-doublets. In Grønn, Atle (ed.), *Proceedings of SuB 12*, 613-627.

付記

本研究はJSPS 科研費 JP18K12386の助成を受けたものです。